

# 横浜トリエンナーレ 2001

YOKOHAMA 2001: International Triennale of Contemporary Art

## 報告書

横浜トリエンナーレ組織委員会

## ごあいさつ

「メガ・ウェイブー 新たな総合に向けて」を全体テーマに、世界の最先端の現代美術を一堂に提示した「横浜トリエンナーレ 2001」は、昨年 11 月 11 日、盛況のうちに無事終了しました。67 日間に及ぶ会期中の入場者は、2 つのメイン会場を合わせて約 35 万人にのぼりました。

難解で閉鎖的と受け取られがちな現代美術ではありますが、私たちは日常的なレベルで同時代の美術作品と向かい合い、作品を感じ、考えることができるような場の創出を目指しました。パシフィコ横浜展示ホールに代表される巨大なスケール感と、38 ヶ国 109 人のアーティストによる多彩な表現を通して、国際展の魅力を十分にアピールし得たことが、これだけ多数の方のご来場につながったのではないかと考えております。海外に目を転じてみれば、日本が新たに芸術交流の場を世界の作家に提供したことを好意的に受け止める評が目立ちました。

しかし、もちろん今回のトリエンナーレが最終ゴールというわけではありません。国際展は、時代の流れを的確に反映しながら継続していくプロジェクトであり、今回の成果と問題点を十分に見極め、次回展へとつなげていくことが何よりも肝要です。この報告書は、展覧会を構成した 4 人のアーティストック・ディレクターのテキスト、トリエンナーレを巡る様々な記録、会期終盤に実施したアンケート調査の集計結果を収録するものです。第 1 回展を振り返ったディレクターの率直な感想や意見を、多様なデータとともに記録に留めることによって、横浜トリエンナーレ 2001 の事業報告とさせていただきます。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、ご支援ご協力くださいました全ての関係機関、法人、関係者の皆様方に対し深甚なる謝意を表します。多数の皆様のご参加、ご支援を受けて、はじめてこの試みは、実り豊かなものとなります。今後とも横浜トリエンナーレへのご高配を切にお願い申し上げます。

平成 14 年 4 月

国際交流基金  
横浜市  
NHK  
朝日新聞社  
横浜トリエンナーレ組織委員会

## 新たなチャレンジの始まり

2001年9月2日、新たな文化創造を期して、現代美術の祭典「横浜トリエンナーレ」が開幕しました。ヴェニスやサンパウロなどの歴史のあるビエンナーレに加え、近年は世界各地で新しい国際美術展が誕生しています。東アジアに限っても、光州（韓国）、上海、台北の各都市にビエンナーレがあり、こうした動きに並ぶ形で、いよいよ横浜においてトリエンナーレ形式の国際展がスタートしました。

国際展は、国内外の一線級のアーティストがしのぎを削る場であり、国際文化交流の場であると同時に、コミュニティを巻き込んだ祝祭の場、あるいは美術と街と人との出会いを創出する場でもあります。また、国際展は世界が直面している問題を明らかにし、観客をも含めた参加者に思考と議論を促し、他者への理解を深めるきっかけを与えてくれる場ともいえるのではないのでしょうか。

国際展を日本で開催しようとする動きは、今に始まったことではありません。かつて「東京ビエンナーレ」と呼ばれる世界水準の国際展がありました。この試みは四半世紀前に事実上終息してしまいましたが、その後美術関係者を中心に様々な方向から新たな国際展開の可能性が模索されてきました。1990年代に入り日本美術の国際化が一気に進んだことも追い風となって、開催機運は高まりをみせ、遂に横浜の地においてフル・スケールによる本格的な国際展が実現の運びとなりました。横浜は、物心両面において海外と日本とを結ぶ役割を歴史的に担ってきた地です。21世紀最初の年に、この国際都市から待望久しかった国際展を立ち上げることは、何か必然的なものを感じずにはいられません。

「横浜トリエンナーレ」の記念すべき第1回展は、4人の日本人（河本信治、建畠哲、中村信夫、南條史生の各氏）がアーティストック・ディレクターを務めました。ドイツ・カッセルの国際展「ドクメンタ」は、毎回1人のアーティストック・ディレクターが大胆なコンセプトによる展覧会を実施して話題となりますが、横浜の第1回展は形式的には、これとは対極的ともいえる方法を採用しました。

私たちは、作品の見方を規定しかねないような狭いコンセプトや、型にはまった展示は、少なくとも大規模な国際展には不向きではないかと考えました。代わって、4人のディレクターの異なる目「複眼」を通して、表現の方法においても、利用するメディアにおいても、ますます多様化する今日の美術のもっとも新しい動向を抽出し、幅広く提示しようと試みたわけです。しかし、それは単に多様な状況を羅列することに終始したというわけではありません。

全体テーマ「メガ・ウェイブー新たな総合に向けて」は、美術と社会とを結ぶ新たな総合のヴィジョンを打ち出すことを謳ったもので、従来の美術という枠組みを越えて他の芸術のジャンルや科学、哲学などとの、また日常的な市民社会との交流・対話の試みを大胆に推し進めることを提唱しています。4人のディレクターは、このテーマの下

で独自の視座から作家を決定し、各自の問題意識を反映させながら展覧会をまとめあげました。4つの異なる個性を発揮しつつも、全体としての統一をはかる— そんな両立が一見困難と思われる課題に挑んだのが今回のトリエンナーレでした。

参加作家たちは、第1回展にかける私たちの熱い意気込みに応え、真剣に取り組んでくれました。日本を含む38ヶ国から参加した全109作家のうち、ほとんど全ての作家は、展示設営とオープニングに合わせ、本人自らが横浜へとやって来ました。短期間のサイクルで世界各地をノマド(遊牧の民)の如く行き来するアーティストたちの多くが、一つの国際展にこれだけ顔を揃えるのはむしろ稀なことであり、これも横浜に対する期待と関心の高さの表れかもしれません。

直接的な人的交流は、国際展がもたらす最大の効能の一つです。作家を中心に人々が出会い、語らいの輪が広がりました。作品制作の過程で作家と協力者の皆さんとが共有した時間は、何物にも替え難い貴重な財産となることでしょう。また、横浜なり日本を作家に実体験してもらったことも大きな意味があったと思います。そこから作家たちがインスピレーションを得て、何らかの形で今後の彼らの創作活動へと結びついていったならば、喜ばしい限りです。

満を持してスタートした横浜トリエンナーレは、幸い35万人もの来場者を得ることができました。その大半が概ね好意的にこの国際展のスタートを受け止めてくださったのは心強い限りです。アンケート調査では、「いろいろな作品があって楽しめた」「驚きがあり刺激的だった」という率直な感想が多数寄せられており、現代美術と生活(日常)との間の乖離が続く現状下に、一石を投じ得たのではないかと自負しております。また、会期中の教育プログラムを通し、学校教育との連携をはかれたことも大きな成果でした。

他方、内容や運営面を中心に一部からは厳しいご意見もいただいております。私たちは、様々な意見に謙虚に耳を傾け、今回展の成果と問題点とを十分に吟味・分析し、次回展へとつなげていかなければなりません。国際展は、ある意味では最終形を持たない、永遠に未完のプロジェクトであるといえるかもしれません。国際展を継続するということは、ただ単に前回展をそのまま踏襲して、徒に回数を重ねることではなく、時代に即応すべく常に試行錯誤を繰り返し、チャレンジを続けていくことなのです。

3年ごとに夏が近づいてくると、街のどこからともなくトリエンナーレを話題とする会話が漏れてきて、波紋のように広がり、やがて始まろうとするトリエンナーレに対する期待で誰もが心を躍らせる— こういった光景が現実のものとなるまでには、長い道のりが待っているかもしれません。しかし、チャレンジは始まりました。多数の皆様のご参加とご支援の下、一つ一つの成果を積み重ねることによって、国際美術展「横浜トリエンナーレ」を一回りも二回りも大きなものに育てていきたいと思っております。

横浜トリエンナーレ組織委員会  
事務局長 尾子隼人

## 実施概要

---

- 会 期 2001年9月2日（日）～11月11日（日）
- 会 場 パシフィコ横浜展示ホール，赤レンガ1号倉庫  
まちづくりギャラリー，みなとみらいギャラリー，横浜開港資料館，横浜市開港記念会館（8月29日～9月9日），神奈川県民ホールギャラリー（8月25日～9月15日）ほか
- 主 催 国際交流基金，横浜市，NHK，朝日新聞社  
横浜トリエンナーレ組織委員会
- 後 援 外務省，文化庁，神奈川新聞社
- 助 成 AFAA; Embassy of France; Asian Cultural Council; Australia Council for the Arts; Austrian Ministry of Culture; Austrian Federal Chancellery; BKA Kunst, Austria; British Columbia Arts Council; Central Union of Artists, Finland; Danish Contemporary Art Foundation; Embajada de Mexico (Instituto Nacional de Bellas Artes, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, Secretaria de Relaciones Exteriores); Erwin und Gisela von Steiner Stiftung, Munich; FRAME Finnish Fund for Art Exchange; IASPIS International Artists' Studio Program in Sweden; ifa Institut für Auslandsbeziehungen e.V.; Israel Ministry of Foreign Affairs; Embassy of Israel; Mondriaan Stichting; Norwegian International Program for Visual Art; The Netherlands Foundation for Visual Arts, Design, and Architecture, Amsterdam; 財団法人野村国際文化財団
  
- アーティストック・ディレクター  
  
河本信治（京都国立近代美術館主任研究官）  
建畠 哲（多摩美術大学教授）  
中村信夫（現代美術センターCCA 北九州 ディレクター）  
南條史生（インディペンデント・キュレーター）
  
- デザイン 西岡 勉
  
- 会場空間構成（パシフィコ横浜展示ホール）  
  
岡部憲明アーキテクチャーネットワーク

---

## 【協 賛】

キリンビール(株), 凸版印刷(株), (株)ベネッセコーポレーション  
森ビル(株), オムロン(株), 東日本電信電話(株)神奈川支店, 松下通信工業(株), 横浜銀行,  
横浜トヨペット・トヨタカラーラ神奈川, 神奈川県民共済生活協同組合, 川本工業(株),  
相模鉄道(株), (株)資生堂, (財)横浜市文化振興財団, 横浜美術館, 学校法人岩崎学園,  
上野トランステック(株), (株)加藤組, 京浜急行電鉄(株), 小糸工業(株), 東京急行電鉄(株)  
東京ガス(株)神奈川支店, , 東京電力(株), 日能研, (株)ファンケル, (株)松尾工務店,  
みなとみらい二十一熱供給(株), 石川島播磨重工業(株), エルゴテック(株), (株)岡村製作所,  
(株)紀伊國屋書店, (株)サカタのタネ, タカナシ乳業(株), 電源開発(株), 日石三菱,  
日本鋼管(株), 日本鋼管工事(株), 三菱重工業(株)横浜製作所, (株)横浜アリーナ,  
横浜信用金庫, (株)横浜スタジアム, (株)横浜みなとみらい 21, 三沢電機(株),  
横浜交通開発(株), (財)横浜市スポーツ振興事業団, 横浜新都市センター(株),  
くもん子ども研究所, 日本出版貿易(株), (株)共栄社, 国際 JV 会, (株)コナカ,  
(株)スルガコーポレーション, 東西興業(株), (株)ハリマビステム, (株)凡人社,  
横浜市場冷蔵(株), 横浜建物管理協同組合, 横浜シティ・エア・ターミナル(株),  
横浜ベイサイドマリーナ(株)

## 【協 力】

日本航空(株), パシフィコ横浜, ヒビノ(株), ヤマト運輸(株), (株)コーエー  
ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル, 横浜ふじライオンズクラブ,  
戸田建設(株), アップルコンピュータ, プラスビジョン(株), キヤノン(株),  
(株)富士通ゼネラル, 三洋電機(株), (株)日立製作所, KDDI(株),  
日立ソフトウェアエンジニアリング(株), (社)横浜青年会議所, 横浜まちづくり倶楽部,  
ヨコハマズベストコレクション

## 組織委員会

---

会 長：藤井 宏昭 (国際交流基金理事長)  
高秀 秀信 (横浜市長)  
海老沢勝二 (NHK会長)  
箱島 信一 (朝日新聞社社長)

委 員：木村尚三郎 (東京大学名誉教授)  
嘉門 安雄 (東京都現代美術館名誉館長)  
陰里 鉄郎 (女子美術大学教授)  
建部 和仁 (国際交流基金常務理事)  
野呂 昌彦 (国際交流基金芸術交流部長)  
宇野 公博 (横浜市市民局長)  
有木 文隆 (横浜市市民文化部長)  
横里 幸一 (NHK事業局長)  
高木 敏行 (朝日新聞社文化企画局長)

### アドバイザー・コミッティー：

<順不同、敬称略>

浅田 彰 (京都大学経済研究所助教授)  
芦原 義信 (建築家/東京大学名誉教授)  
池辺 晋一郎 (作曲家/東京音楽大学教授)  
今井 敬 (社団法人経済団体連合会会長)  
荻野アンナ (作家/慶応義塾大学助教授)  
陰里 鉄郎 (女子美術大学教授)  
酒井 忠康 (神奈川県立近代美術館館長)  
高階 秀爾 (東京大学名誉教授)  
田中 幸人 (熊本市美術専門員)  
高梨 昌芳 (横浜商工会議所会頭)  
堤 清二 (財団法人セゾン文化財団理事長)  
原 俊夫 (原美術館館長)  
樋口廣太郎 (アサヒビール株式会社名誉会長)  
平山 郁夫 (美術家)  
福武總一郎 (株式会社ベネッセコーポレーション代表取締役社長)  
福原 義春 (株式会社資生堂会長)  
真野 響子 (女優)  
宮本 亜門 (演出家)  
森 稔 (森ビル株式会社代表取締役社長)

### インターナショナル・コミッティー：

ダニエル・バーンバウム (フランクフルト州立造形大学学長)  
フランチェスコ・ボナミ (シカゴ現代美術館キュレーター、「2000年マニフェスタ」キュレーター)  
サスキア・ボス (アムステルダムデ・アール現代美術館キュレーター、「2001年バルン・ビエンナーレ」キュレーター)  
ダン・カメロン (コミュニズム・オブ・コンテポラリー・アート、ニューヨークシニアキュレーター)  
リン・クック (DIAアート・センターキュレーター)  
パウロ・ヘルケンホフ (ニューヨーク近代美術館キュレーター、「パウロ・ビエンナーレ1998」チーフキュレーター)  
キム・ホンヒ (美術史家、サムスン・スペースディレクター、「2000年光州ビエンナーレ」コミッションナー)  
リー・シエンティン (美術評論家、キュレーター)  
ジャン＝ユベール・マルタン (デュッセルドルフ美術館ディレクター、「2000年リヨン・ビエンナーレ」チーフキュレーター)  
本江 邦夫 (多摩美術大学教授)  
ハンス＝ウルリッヒ・オブリスト (パリ市立近代美術館キュレーター)  
アピナン・ポーサーヤナン (チュロロン大学ガゼット・リソース・センター館長)

## 参加作家

(アルファベット順)			
作家名	日本語表記	出身国／在住	生年
Adel Abdessemed	アデル・アブデスメッド	(アルジェリア／フランス)	1971
Marina Abramović	マリーナ・アブラモヴィッチ	(旧ユーゴスラビア／オランダ)	1946
Aida Makoto	会田 誠	(日本／日本)	1965
Akasegawa Genpei	赤瀬川 原平	(日本／日本)	1937
Akimoto Kitsune	秋元 きつね	(日本／日本)	1968
Akita Masami (Merzbow)	秋田 昌美 (メルツバウ)	(日本／日本)	1956
Bahc Yiso	バク・イソ	(韓国／韓国)	1957
Oladélé Ajiboyé Bamgboyé	オラデレ・アジボイエ・バンボイエ	(ナイジェリア／英国)	1963
Bigert & Bergström	ビガート&ベルグストロム	(スウェーデン／スウェーデン)	1965／1962
John Bock	ヨーン・ボック	(ドイツ／ドイツ)	1965
Cai Guo-Qiang	蔡 國強/ツァイ・グオチャン	(中国／米国)	1957
Candy Factory	キャンディ・ファクトリー	(日本／日本)	
Casagrande and Rintala	カサグランデ・アンド・リンターラ	(フィンランド／フィンランド)	1971／1969
Maurizio Cattelan	マウリツィオ・カテラン	(イタリア／イタリア)	1960
Choi Jeong Hwa	チェ・ジョンファ	(韓国／韓国)	1961
Jeannette Christensen +	ジャンネット・クリステンセン+	(ノルウェー/ノルウェー)	1958／
Anders Tomren	アンデルス・トムレン		1965
Joelle Ciona	ジョエル・シオナ	(カナダ／カナダ)	1968
Florian Claar	フロリアン・クラール	(ドイツ／日本)	1968
Jeroen de Rijke + Willem de Rooij	ユルーン・デ・レイケ+ウィルム・デ・ローイ	(オランダ/オランダ)	1970／1969
Destiny Deacon	デスティニー・ディーコン	(オーストラリア／オーストラリア)	1957
Tacita Dean	タシタ・ディーン	(英国／英国)	1965
Ding Yi	ディン・イー	(中国／中国)	1962
Atul Dodiya	アトゥール・ドディヤ	(インド／インド)	1959
Anita Dube	アニタ・ドゥベ	(インド／インド)	1958
Karl Dunér and Peder Freij	カール・ドゥネア・アンド・ペーダー・フライ	(スウェーデン／スウェーデン)	1963／1954
Jimmie Durham	ジミー・ダーハム	(米国／ドイツ)	1940
Maria Eichhorn	マリア・アイヒホルン	(ドイツ／ドイツ)	1962
Olafur Eliasson	オラファー・エリアソン	(デンマーク／デンマーク)	1967



Endo Toshikatsu	遠藤 利克	(日本/日本)	1950
Peter Fischli & David Weiss	ペーター・フィッシュリ&ダヴィッド・ヴァイス	(スイス/スイス)	1952/1946
Alicia Framis	アリシア・フラミス	(スペイン/オランダ)	1967
Jacqueline Fraser	ジャクリーヌ・フレイザー	(ニュージーランド/ニュージーランド)	1956
Yona Friedman	ヨナ・フリードマン	(ハンガリー/フランス)	1923
Fujihata Masaki	藤幡 正樹	(日本/日本)	1956
Carlos Garaicoa	カルロス・ガライコア	(キューバ/キューバ)	1967
Liam Gillick	リアム・ギリック	(英国/英国)	1964
Dominique Gonzalez-Foerster	ドミニク・ゴンザレス＝フェレステル	(フランス/フランス)	1965
Felix Gonzalez-Torres	フェリックス・ゴンザレス＝トレス	(キューバ)	1957-1996
Joseph Grigely	ジョセフ・グリグリー	(米国/米国)	1956
Grönlund\Nisunen	グリュンルンド\ニスーネン	(フィンランド/フィンランド)	1967/1962
Katya Guerrero	カティア・グエレロ	(フィリピン/フィリピン)	1970
Ham Kyung	ハム・キュン	(韓国/韓国)	1966
Heri Dono	ヘリ・ドノ	(インドネシア/インドネシア)	1960
Mats Hjelm	マッツ・イエルム	(スウェーデン/スウェーデン)	1959
Carsten Höller	カールステン・フラー	(ベルギー/スウェーデン)	1961
Huang Yong Ping	黄永砅 /ホアン・ヨン・ピン	(中国/フランス)	1954
Pierre Huyghe	ピエール・ユイグ	(フランス/フランス)	1962
Ichihara Hiroko	イチハラヒロコ	(日本/日本)	1963
Ichianagi Toshi	一柳 慧	(日本/日本)	1933
Ito Zon	伊藤 存	(日本/日本)	1971
Eduardo Kac	エドワルド・カック	(ブラジル/米国)	1962
Kasahara Emiko	笠原 恵実子	(日本/米国)	1963
William Kentridge	ウィリアム・ケントリッジ	(南アフリカ共和国/南アフリカ共和国)	1955
Koo Jeong-a	クー・ジョン・ア	(韓国/フランス)	1967
Kusama Yayoi	草間 彌生	(日本/日本)	1929
Sowon Kwon	ソウォン・クオン	(韓国/米国)	1963
Siobhan Liddell	シボーン・リデル	(英国/米国)	1965
Aernout Mik	アーナウト・ミック	(オランダ/オランダ)	1962
Laurent Moriceau+20471120/	ローラン・モリソー+20471120/	(フランス/フランス)	1964/
NAKAGAWA SŌCHI	中川装置	(日本/日本)	
Muraoka Saburo	村岡 三郎	(日本/日本)	1928
Nakazawa Ken	中沢 研	(日本/日本)	1970
Mariele Neudecker	マリール・ノイデッカー	(ドイツ/英国)	1965
Jun Nguyen-Hatsushiba	ジュン・グエン＝ハツシバ	(ベトナム/ベトナム)	1968

Oda Masanori	ヲダ・マサノリ	(日本／日本)	1966
Okie Keisuke	沖 啓介	(日本／日本)	1952
Rainer Oldendorf	ライナー・オルデンドルフ	(ドイツ／フランス)	1961
Ono Yoko	オノ・ヨーコ	(日本／米国)	1933
Orimoto Tatsumi	折元 立身	(日本／日本)	1946
Gabriel Orozco	ガブリエル・オロツコ	(メキシコ／メキシコ)	1962
Ozawa Tsuyoshi	小沢 剛	(日本／日本)	1965
Florian Pumhösl	フロリアン・プムフースル	(オーストリア／オーストリア)	1971
Alexandra Ranner	アレクサンドラ・ラナー	(ドイツ／ドイツ)	1967
rasmus knud +	ラスムス クヌード+	(デンマーク／デンマーク)	1968／1968／
Søren Andreasen	ソーレン・アンダーセン		1964
Navin Rawanchaikul	ナウィン・ラワンチャイクン	(タイ／タイ)	1971
Jason Rhoades	ジェイソン・ローズ	(米国／米国)	1965
Pipilotti Rist	ピピロッティ・リスト	(スイス／スイス)	1962
Anri Sala	アンリ・サラ	(アルバニア／フランス)	1974
Allan Sekula	アラン・セクラ	(米国／米国)	1951
Shimabuku	島袋 道浩	(日本／日本)	1969
Shinoda Taro	篠田 太郎	(日本／日本)	1964
Shiota Chiharu	塩田 千春	(日本／ドイツ)	1972
Andreas Slominski	アンドレアス・スロミンスキー	(ドイツ／ドイツ)	1959
Sone Yutaka	曾根 裕	(日本／米国)	1965
STELARC	ステラーク	(オーストラリア／オーストラリア)	1946
Sugimoto Hiroshi	杉本 博司	(日本／米国)	1948
Sun Yuan + Peng Yu	孫原+彭禹/スン・ユエン+ペン・ユー	(中国／中国)	1972／1973
Tabaimo	束芋	(日本／日本)	1975
Fiona Tan	フィオナ・タン	(インドネシア／オランダ)	1966
Javier Téllez	ハヴィア・テレーズ	(ベネズエラ／米国)	1969
Rirkrit Tiravanija	リクリット・ティラヴァニヤ	(アルゼンチン／ドイツ)	1961
Laure Tixier	ロール・ティクシエ	(フランス／フランス)	1972
Tomita Toshiaki	富田 俊明	(日本／日本)	1971
Tone Yasunao	刀根 康尚	(日本／米国)	1935
Tsubaki Noboru + Muroi Hisashi	椿 昇+室井 尚	(日本／日本)	1953／1955
Tsuzuki Kyoichi	都築 響一	(日本／日本)	1956
Uri Tzaig	ウリ・ツァイグ	(イスラエル／イスラエル)	1965
Eulàlia Valldosera	ユラリア・ヴァルドセラ	(スペイン／スペイン)	1963
Marijke van Warmerdam	マライケ・ファン・ヴァルメルダム	(オランダ／オランダ)	1959

Sergio Vega	セルジオ・ヴェガ	(アルゼンチン/米国)	1959
Viktor & Rolf	ヴィクトール&ロルフ	(オランダ/オランダ)	1969/1969
Franz West	フランツ・ヴェスト	(オーストリア/オーストリア)	1947
Krzysztof Wodiczko	クシュトフ・ウディチコ	(ポーランド/米国)	1943
Johannes Wohnseifer	ヨハネス・ヴォンザイファー	(ドイツ/ドイツ)	1967
Wuershan	烏尔善/ ウーエルシヤン	(中国/中国)	1972
Cerith Wyn Evans	ケリス・ウイン・エヴァンス	(英国/英国)	1958
Xing Danwen	シン・ダンウェン	(中国/米国)	1967
Yanagi Miwa	やなぎみわ	(日本/日本)	1967
Yang FuDong	楊福東 /ヤン・フードン	(中国/中国)	1971
Zhang Huan	張洄 / Zhang・ホアン(中国/米国)		1965

<参加アーティストへのご協賛>

旭硝子	タカナシ乳業	Adidas, Germany
NTTドコモ	トイズ	AMBERSIL Ltd., U.K.
エプソン販売	東京グルメ企画	BACARDI-MARTINI ASIA PACIFIC LTD
小田文具店	トリコロール	Duson 21 Co., Ltd.
鐘淵化学工業	日本ビクター	GARAM GALLERY
カワイイファクトリー	バックテクノロジーズ	GOLDEN ARTISTS COLORS, U.S.A.
キーコーヒー	ヒューマン・プランニング	Institut für Auslandsbeziehungen, Stuttgart
崎陽軒	富士通	Jeanne and Michael Klein
麒麟ビール	星	Kunstfonds e.V., Bonn
コニカカラーマーケティング	ボンパドウル	Toby Devan Lewis
サクマ製菓	松下電工	LOGO WERKE, Germany
資生堂	元町厳島神社	Judith Neisser
スイスエアー	山下寝具	Ssamzie Co., Ltd.
セイコーエプソン	横浜エフエム放送	University of Florida
ソフ		VAISALA K.K., Japan

## I 収支決算

### ◎平成 11 年度決算

#### 1. 収入 (単位：円)

項目	当初予算額	決算額
国際交流基金分担金	29,139,000	32,356,505
横浜市分担金	15,000,000	15,000,000
その他	0	130
合計	44,139,000	(イ) 47,356,635

#### 2. 支出

項目	当初予算額	決算額
事前準備費（専門家の派遣、印刷物制作費、事務局経費など）	44,139,000	(ロ) 40,828,287

#### 3. 次年度への繰越分

$$(イ) - (ロ) = 6,528,348$$

### ◎平成 12 年度決算

#### 1. 収入 (単位：円)

項目	当初予算額	決算額
国際交流基金分担金	58,749,000	59,126,577
横浜市分担金	15,000,000	15,000,000
前年度繰越金	6,528,000	6,528,348
その他	0	118,606
合計	80,277,000	(イ) 80,773,531

#### 2. 支出

項目	当初予算額	決算額
事前準備費（専門家の派遣、印刷物制作費、事務局経費など）	80,277,000	(ロ) 73,944,624

#### 3. 次年度への繰越分

$$(イ) - (ロ) = 6,828,907$$

平成13年度横浜トリエンナーレ組織委員会決算報告

収入の部

(単位：円)

項 目	予算額	決算額	増減	説 明
国際交流基金分担金	178,994,000	178,994,000	0	
横浜市分担金	70,000,000	70,000,000	0	
朝日新聞社分担金	30,000,000	30,000,000	0	
入場料収入	208,006,000	202,408,896	5,597,104	
ｶｯｸﾞ 等販売	13,000,000	11,282,489	1,717,511	
企業協賛金等	100,000,000	100,347,101	347,101	助成金を含む
前年度繰越金	6,828,907	6,828,907	0	平成12年度繰越金
合計	606,828,907	599,861,393	6,967,514	

支出の部

(単位：円)

項 目	予算額	決算額	増減	説 明
作家関連経費	297,800,000	296,702,566	1,097,434	
会場関連経費	112,300,000	112,998,106	698,106	
会場運営費	48,700,000	48,760,937	60,937	
広報費	43,645,000	46,066,511	2,421,511	
ｶｯｸﾞ 関係経費	12,000,000	12,557,609	557,609	
関連行事経費	16,665,000	16,653,223	11,777	
専門家派遣費	1,600,000	64,000	1,536,000	
国内旅費	3,250,000	2,783,312	466,688	
事務局費	64,040,000	63,211,497	828,503	
予備費	6,828,907	0	6,828,907	
合計	606,828,907	599,797,761	7,031,146	

収入と支出の差額分 63,632円については、平成14年度予算に繰り越します。

トリエンナーレ組織委員会決算とは別に、各主催団体が別途次の負担を行った。

(1) 国際交流基金

作品輸送費の一部や国際委員の招へい費など81,299千円を負担した。

(2) 横浜市

会場関連経費、光熱水費などで、約2億円を負担した。また、横浜市が主催者に加わったことにより、メイン会場のパシフィコ横浜展示ホールの使用料減免につき、特段の配慮を受けることができた。

## II 入場者

延べ67日間にわたる実質会期中の入場者数は、合計349,179人にのぼった。これは2つのメイン会場（パシフィコ横浜展示ホール、赤レンガ1号倉庫）入り口における実際のカウント数である。入場チケットは2日間有効で、来場当日は何度でも両会場への入場を可とした。

### 延べ入場者数（カウント数）

	パシフィコ横浜展示ホール	赤レンガ1号倉庫	合計
入場者数	216,765人	132,414人	349,179人
1日平均	3,235人	1,976人	5,211人

### 入場者数内訳

	両会場合計入場者数	備考
有料入場者	153,040人	入場券販売枚数 166,015枚
無料入場者	31,802人	招待券利用者等/無料割合 17.2%
再入場者	164,337人	2日間もしくは2会場に入場した者
合計	349,179人	

### 最高入場者数記録日：平成13年11月11日（日＝最終日） 天気晴れ

	パシフィコ横浜展示ホール	赤レンガ1号倉庫	合計
入場者	19,450人	7,007人	26,457人

### 最低入場者数記録日：平成13年9月10日（金） 曇り時々雨

	パシフィコ横浜展示ホール	赤レンガ1号倉庫	合計
入場者	507人	354人	861人

### 主な来場者（VIP）

福田康夫官房長官

遠山敦子文部科学大臣

佐々木正峰文化庁長官

石原慎太郎東京都知事

ヴィクトリア皇太子（スウェーデン王女）

ジャン＝ジャック・アヤゴン 国立ポンピドゥー芸術文化センター総裁

グレン・ロウリー ニューヨーク近代美術館館長

アンジェイ・ジェリンスキ ポーランド文化・国家遺産大臣  
デイヴィッド・リム シンガポール情報文化大臣

### Ⅲ カタログ

カタログは、横浜での実際の展示風景写真を盛り込む形で、会期後半の平成13年10月19日発行となった。発行日までは予約販売を受け付け、発行後はメイン会場内のショップ2箇所（NADiff、ハラミュージアムショップ）において店頭販売を行なったところ、合わせて7,173冊の売上げがあった。また、カタログとは別に作家解説等をコンパクトにまとめた『ハンディー・ガイド』（A5判、80頁）を用意し、会期中に販売を行なった。

#### カタログ収録内容

- ・アーティスティック・ディレクターによるテキスト
- ・全109作家の作家解説
- ・横浜での展示風景写真（124点）
- ・作家解説中での作品写真（373点、各作家の代表的な作品を中心に、一部今回の出品作品写真を含む）
- ・作家略歴
- ・出品作品リスト

#### 執筆者

河本信治、建畠哲、中村信夫、南條史生、東谷隆司、一色陽子、上崎千、CCA北九州（三宅暁子、山田彩子、スコット・オルソン）、エリック・シャイナー、中村敬治、原万希子、ロジャー・マクドナルド、室井絵里

#### 仕様等

判型： B5判変型（260×175mm）  
総頁： 408頁  
言語： 日本語と英語のバイリンガル  
印刷： オフセット印刷（カラー）

編集： 横浜トリエンナーレ事務局、真壁佳織、三上豊  
デザイン： 西岡勉  
制作： 印象社  
印刷： 凸版印刷株式会社  
発行： 横浜トリエンナーレ組織委員会  
発行部数： 10,500部  
発行日： 平成13年10月19日  
定価： 3,150円（税込）



#### IV 関連プログラム

オープニング時は、シンポジウム、講演会、特別プロジェクトを実施したほか、出品作家（一柳慧、笠原恵実子、ジャン・ホアン）によるパフォーマンスも披露された。会期中はアーティスト・トークと音楽イベントをシリーズ化して行なうとともに、ナウイン・ラワンチャイクンと折本立身が各々多数の参加者を募って、街頭パフォーマンスを繰り広げ、「アートの祭典」を盛り上げた。

##### (1) シンポジウム 「メガ・ウェイブを巡って」

2001年9月2日（日）13:00～18:00 パシフィコ横浜アネックスホール（A,B）  
国際ナショナル・コミッティーの本江邦夫委員（多摩美術大学教授）による基調講演の後、アーティストック・ディレクターを中心に4つのセッションを2会場に分けて同時進行により実施した。延べ約700名の聴衆が集まった。

##### ① 「今のための未来：いかに生き残るか」

ディレクター： 中村信夫

メンバー： サスキア・ボス（デ・アペル現代美術センター ディレクター）、ハンス・ウルリッヒ・オブリスト（パリ市立近代美術館キュレーター）、アデル・アブデスメット、ケリス・ウィン・エヴァンス、マリア・アイヒホルン、アンリ・サラ、ジミー・ダーハム、オラデレ・アジボイエ・バンボイエ、リクリット・ティラヴァニヤ、都築響一、オラファー・エリアソン（以上、出品作家）

##### ② 「私は誰に何を伝えるのか？」

ディレクター： 河本信治

メンバー： リン・クック（DIAアート・センター キュレーター）、室井尚、椿昇、アラン・セクラ、沖啓介、セルジオ・ヴェガ（以上出品作家）

##### ③ 「Asia as Passage – パッセージとしてのアジア」

ディレクター： 建畠哲

メンバー： アピナン・ポーサーヤナン（チュラロンコン大学アガミックリサーチセンター準館長）、浅田彰（京都大学経済研究所助教授）、蔡國強（出品作家）

##### ④ 「メルトダウン：ポスト・カオスの砂漠から」

ディレクター： 南條史生

メンバー： ダニエル・バーンバウム（フランクフルト州立造形大学学長）、黒崎政男（東京女子大学教授）、椿昇、ヲダマサノリ、ジャクリーン・フレーザー（以上、出品作家）

※ シンポジウムは、トリエンナーレの準備段階にも2度実施した。

「横浜トリエンナーレ 2001 にむけて：国際展の現状と未来」

2000年3月24日（金） 10：00～16：30 国際交流基金

基調講演： ダニエル・バーンバウム、キム・ホンヒ、ハンス＝ウルリッヒ・オブリスト

パネリスト： サスキア・ボス、リン・クック、ジャン＝ユベール・マルタン、本江邦夫、リー・シェンティン、南條史生（モデレーター）

「明日への波—横浜トリエンナーレ 2001」

2000年12月5日（火） 14：00～18：00 横浜シンポジア

中間報告： 河本信治

パネリスト： 建畠哲、パウロ・ヘルケンホフ、フランチェスコ・ボナミ、アピナン・ポーサーヤナン、ダン・キャメロン、南條史生、中村信夫、水沢勉（モデレーター）

(2) 講演会 「横浜トリエンナーレを迎えて — 各国のアート現場から」

2001年8月31日（金） 13：00～18：00 横浜美術館レクチャーホール

ヴェルニサージュの初日、インターナショナル・コミッティー委員として来日中の4人のキュレーターが、中国、韓国、北米・南米、欧州の現代美術の新しい動向を各々リポート、最後に質疑応答を行なった。聴講者約200名。

① リー・シェンティン（美術評論家、インディペンデント・キュレーター）

「中国における現代美術の状況」

② フランチェスコ・ボナミ（シカゴ現代美術館シニア・キュレーター）

「キュレーターズ・ウィルス—欧州における現代美術の状況」

③ ダン・カメロン（ニューミュージアム・オブ・コンテンポラリーアート シニア・キュレーター）

「浸透：アメリカ美術の再定義」

④ キム・ホンヒ（美術史家、サムジースペース ディレクター）

「韓国ポストモダン美術を概観する」

(3) 秋田昌美オープニング・プロジェクト

2001年8月31日（金） 22：00～ 赤レンガ・カフェ

ヴェルニサージュの初日、出品作家でありノイズ・ミュージックを代表する音楽家・秋田昌美（メルツバウ）が、現代の音の世界で活躍する8人のアーティストとともにライブ・パフォーマンスを行なった。1人20分ほどのライブを展開し、その合間に即興による音/音楽が作成されていた。

出演：稲田光造・松永康平、i. d、豊田奈千甫、Russell Haswell、Hiaz、Pita、Hecker、MERZBOW（秋田昌美）

(4) 音楽イベント

赤レンガ・カフェを会場に、3回シリーズの音楽イベントを実施した。

① SONIC PORT @AKA-RENGA CAFÉ Vol.1

2001年9月8日（土） 22：00～

国内外における最新の音楽動向を紹介するライブ、DJ イベント。実験性を含むクラブ・ミュージックを紹介した。出演者には実験音楽の第一人者であり、横浜トリエンナーレ出品作家でもある刀根康尚を中心に、国内外から先鋭的なパフォーマーが出演した。

出演：DJ KENSEI (DJ)、KOSS, Ebz (演奏)、内海イズル (DJ)、刀根康尚 (演奏)、  
エルデム・ツナカン (DJ)、スパイク (演奏)、パトリック・パルシンガー (DJ)

<入場者：350人>

② SONIC PORT @AKA-RENGA CAFÉ Vol. 2

2001年9月16日（日） 18：30～

オープニング・プロジェクトを実施した秋田昌美と、秋田の音楽に強く影響を受け、交流も深いウィーン在住のミュージシャン、ヘッカーとラッセル・ハズウェルの出演するコンサート。本編では、3人が一斉に音を出す形で100分間1曲の演奏となった。

<入場者：180人>

③ SONIC PORT @AKA-RENGA CAFÉ Vol. 3

2001年9月22日（土） 18：30～

コンピューター・ミュージックの若手作曲家・演奏家のヲノ・サトルと有馬純寿のグループを中心としたコンサート。コンピューターの最新システムを利用した演奏やヴォイス・パフォーマンスのほか、コンピューター画面をリアルタイムに映像として投影するなど、コンピューター・ミュージックと肉体性、あるいはコンピューター・ミュージックと視覚をテーマとするコンサートを行なった。

出演：ヲノサトル、Venus in Virgo (有馬純寿&REIKO.A.)、横川タダヒコ/映像：

佐々木成明

<入場者：150人>

(5) アーティスト・トーク

毎回出品作家が登場、日頃の関心事や表現活動のモチーフ、今回のトリエンナーレの出品作品などについて軽妙洒脱に語った。

① 赤瀬川原平 「赤瀬川原平～包み隠してお見せします」

2001年9月15日（土） 18：30～ 赤レンガ・カフェ

ごく限られた時間しか見ることができない作品をトリエンナーレに出品した赤瀬川と日本美術応援団を標榜する山下祐二明治学院大学教授を迎え、包む、隠すことへのこだわり、そして出品作をめぐる考察を聞いた。

<入場者：120人>

② 小沢剛 「アフター・ザ・トンチキ〜トンチキハウスの軌跡」

2001年9月29日（土） 15：00～ パシフィコ横浜展示ホール内

小沢剛の「トンチキハウス」プロジェクト期間中(8/25～9/15)に繰り広げられた数々のワークショップやライブイベントなどを振り返った。出演は小沢剛と新川貴詩(トンチキハウス新聞班)。

<来場者：70人>

③ 椿昇+室井尚 「フロム・ザ・インセクト・ワールド〜『飛蝗』プロジェクトの軌跡」

2001年9月30日（日） 14：00～ パシフィコ横浜アネックスホール

椿昇+室井尚のプロジェクト<インセクト・ワールド>の巨大な飛蝗バルーン作品がヨコハマ グランド インターコンチネンタル ホテルに設置されるまでの軌跡をビデオと両者のトークでたどった。この2人のコラボレーションを提案した河本信治アーティストック・ディレクターと作品制作に尽力した学生ボランティアも出演した。

<入場者：120人>

④ 都築響一 「都築響一〜横浜秘宝館」

2001年10月6日（土） 18：30～ 赤レンガ・カフェ

身近にありながら誰も語ろうとしない奇妙なスポットを取材しつづけるエディター／ジャーナリストの都築によるスライド・レクチャー。日本の知られざる文化の魅力を語った。

<入場者：140人>

⑤ 会田誠、東芋 「会田誠+東芋〜趣味対談」

2001年10月7日（日） 18：30～ 赤レンガ・カフェ

国内でもっとも注目度の高い若手アーティスト、会田誠と東芋による対談形式のトーク。漫画やCD、ビデオなど2人が互いにこれまでに親しんだモノを持ち寄り、お互いの興味の類似点や相違点を語り合った。

(6) 現代美術スタンプラリー

トリエンナーレを含め、同時期に開催中の4本の展覧会を観覧した方に、出品作家の20471120/中川正博による特製Tシャツをプレゼントするというもの。首都圏の5つの美術館（横浜美術館、東京都現代美術館、原美術館、東京オペラシティアートギャラリー、ワタリウム美術館）との提携により実施した。

## V 教育プログラム

来場者にトリエンナーレの体験を深め、現代美術に親しんでもらうことを目的に、会期のほぼ全般を通し、教育プログラムを各種実施した。その中心を成したのは、学校教育との連携をはかったスクール・プログラムと一般来場者向けのギャラリー・ツアーであり、あわせて約 8,000 人の参加者を得た。ボランティア・スタッフ 67 名がこれらのプログラムの企画・運営を支えた。

### 1. スクール・プログラム

同時代の美術を紹介するトリエンナーレは、新しい美術教育を実践する恰好な場であるとして、学校関係者にトリエンナーレの活用を呼びかけた。9月16日と30日の2日にわたって教師のためのガイダンスを実施（図工・美術専門教員をはじめ、のべ89名が参加）し、トリエンナーレの授業への具体的な活用方法例について、実際に作品を前にして教育プログラム・スタッフと話し合う機会を持った。

#### (1) スクール・ツアー

- ・幼稚園から小・中学校、高等学校、養護学校の児童・生徒、教員ら18校の1,307名が参加。教育プログラム・スタッフと一緒に場内を観覧して回り、展示作品の説明を聞いたり、それぞれが見て感じ取ったことについて話し合ったほか、一部は自由鑑賞の時間に充てられることもあった。
- ・事前に教師とスタッフが打合せ・会場の下見を行ない、参加する学校の目的やニーズに応じたコース設定を試みた。
- ・参加校のほとんどが授業の一環として学年単位で利用していた。一部には、課外授業や部活動としての利用もあった。
- ・プログラム参加後、6校より感想文やメッセージの形で事務局にフィードバックが寄せられた

#### (2) 学校によるトリエンナーレ観覧

- ・開催地の横浜市・神奈川県に限らず、65校より4,734名が参加した。参加当日にスタッフより、展覧会の概要と鑑賞上のお願いを伝えた後は、教師の引率による鑑賞となった。鑑賞時間は、パシフィコ会場だけでおおよそ1時間30分から2時間ぐらいというのが、平均的なところであった。
- ・総合学習の一環として、「地域に親しむ」「国際理解」といったテーマを掲げる学校や自前のワークシートを用意して臨む学校もあった。
- ・アンケート調査によれば、来場前に8割の学校が、また来場後には7割の学校が授業の題材としてトリエンナーレを取り上げている。また8割の学校が次回にまた参加したいとの回答を寄せた。

## 2. ビジター・プログラム

来場者に展示作品をより楽しく、豊かに鑑賞してもらうための一助として、ギャラリー・ツアー、ワークショップ、音声ガイドを実施した。

### (1) ギャラリー・ツアー

一般来場者を対象に、9月～10月の2ヶ月間、毎週水曜日と土曜日にパシフィコ横浜展示ホールと赤レンガ1号倉庫において実施、全23回で637名が参加した。先着20名（手話付きの回は10名）が3人の教育プログラム・スタッフとともに1時間かけて会場を巡るもので、展覧会の概要や展示作品、参加アーティストについての解説を聞くとともに、参加者とスタッフとの間でディスカッションも行なわれた。このスタッフの大多数は研修を受けたボランティアであり、毎回どのような作品を選び、どのようなツアーにするかは、スタッフ自身の決定に委ねられた。アンケート結果によれば、参加者（7割は女性だった）の9割以上が内容に満足したと回答している。

### (2) 特別ギャラリー・ツアー

多様なグループがまとまって鑑賞を行なうに際し、依頼を受けて行なったギャラリー・ツアー。鑑賞目的は、視察、大学の校外授業、研修、娯楽など多岐にわたっており、各々の目的に合わせたコース・内容の設定を行なった。37のグループ、合計891名が参加した。

主な参加グループ： 横浜市市会議員、神奈川県議会議員、横浜市中区連合会、日韓文化交流協会、企業メセナ協議会、慶應義塾大学、東京純心女子大学、神奈川県立大和西高校PTA、乳母車を利用する父母グループ、旭区医師会、世田谷美術館美術大学、佐倉市美術館ボランティア・スタッフほか

### (3) スタッフ・トーク

横浜トリエンナーレ事務局に籍を置き、主にアーティストック・ディレクターを補佐する業務を行なった展覧会コーディネーターやリサーチ・アシスタントなどをガイド役とするギャラリー・ツアー。延べ12回、116名が参加した。現場に携わったスタッフにしかできない話は、特に参加者の関心と興味を喚起し、活発なディスカッションが行なわれた。

### (4) ワークショップ

屋外作品の大半が大なり小なり公開制作の性格を有しており、トリエンナーレの開催自体をもって街を舞台にしたワークショップとも言われる所以であるが、特に観客の参加を呼びかけつつ、以下のワークショップを実施した。

#### ① 「フルーツ・ツリー」ワークショップ

チェ・ジョンファ作の「フルーツ・ツリー」を利用したワークショップ。桜木町駅近くに設置された作品を囲んで、果物や野菜の形をした短冊が作品の周囲に吊るされた。トリエンナーレの最終日のワークショップとして実施し、約2,400名が参加、次回のトリエンナーレに向けての様々なメッセージが短冊に書き込まれた。

②「トンチキハウス」事始

小沢剛が神奈川県民ホール・ギャラリーにおいて「トンチキハウス」プロジェクトを展開するに先立ち、ハウスで使用する座布団とちゃぶ台を参加者と一緒になって制作した。

③キッズ・アワード～僕のわたしのお気に入り～

小学3年生～6年生を対象としたワークショップ。9月15日と22日の2回に分けて実施、延べ20人が参加した。参加した子供たちが審査員となって、会場を回り、それぞれ自分の気に入った作品に自分なりの「賞」を与えるという内容。一人ひとりが選定作品の絵を描き、自分が選んだ作品の前で賞の発表を行なった。

(5) 音声ガイド

パシフィコ展示ホールにおいて音声ガイドのサービスを有料で行なった。30点の作品の解説（各々1分程度）を利用者の好きな順番・場所でヘッドホンを通して聞くというもので、目の前に展示されている作品についての基本的な情報やその背景がアーティストの日頃の制作姿勢とともに平明に語られた。更にアーティストック・ディレクターへの短いインタビュー、屋外に展示された作品についての言及、基礎的な用語解説なども盛り込まれ、会期中の利用者は7,386人にのぼった。なお、赤レンガ倉庫については、出品作家の刀根康尚が音声ガイドシステムを自身の表現メディアとして利用した作品を発表した。

## VI 広報

広報は、トリエンナーレとは何かということを説明し、このイタリア語を日本国内に定着させることから始めた。地元・横浜と首都圏での浸透を特に重視しつつも、海外をも視野に入れた多面的な広報活動を展開した。NHK 及び朝日新聞をはじめ、多様なメディアが、従来の美術展報道とは一味違った多彩なアプローチでトリエンナーレを取り上げた。

### (1) 記者発表

第1回=2000年3月17日 パシフィコ横浜会議センター

事業概要、第一次候補作家（約30名）の発表後、メイン会場を見学。

第2回=2000年11月15日 国際交流基金・国際会議場

準備状況の中間報告、第二次候補作家（約40名）の発表とともに、作家の蔡國強氏とアリシア・フラミス氏がスピーチを行なった。また、草間彌生氏がビデオでメッセージを寄せた。

第3回=2001年5月25日 国際交流基金・国際会議場

全出品作家を発表。多数の作家が同席し、トリエンナーレへの期待や自身の展示作品プランについて語った。

第4回=2001年9月1日 パシフィコ横浜展示ホール・アネックス

ヴェルニサージュの2日目、プレス関係者等とアーティスティック・ディレクターとの間で質疑応答を行なった。

### (2) 各メディアとの連携

NHK、朝日新聞社のメディアを中心に、新聞各紙、民放各局をはじめ、ラジオ局、各種雑誌に至るまで幅広く情報提供を試み、報道を依頼した。その結果、多数のメディアの協力を得ることとなり、様々な切り口からトリエンナーレが紹介された。別添「トリエンナーレを取り上げたメディア一覧」参照。

### (3) 印刷物

ポスターやチラシ等の印刷物を作成し、全国の美術館、学校、図書館、画廊、横浜市内の公共施設、並びにチケットぴあやファミリー・マートの店舗に配布、掲出を依頼した。また、組織委員会の季刊誌『横浜トリエンナーレ・ニュース』（A4判カラー8頁、部数50,000～100,000部）を3回発行し、主に作家関係の情報提供に努めた。

### (4) ホームページ <<http://www.jpjf.go.jp/yt2001/>>

組織委員会では、横浜トリエンナーレのホームページを立ち上げ、和英両語で最新情報を提供、本年2月末日までに合計229,515件のアクセスを得た。



(5) ハローダイヤル <03-3272-8600>

一般からの一義的な問い合わせに対応するため、NTT 番号情報㈱を通して、ハローダイヤルを開設。2000年11月15日～2001年11月11日までの1年間に合計12,974件の案内を行なった。項目としては、「会期・会場・休場日・概要等」に関する問い合わせが18%と最も多く、次いで「チケットについて」14%、「交通目標/パシフィコ横浜展示ホール」10%の順であった。

(6) 横浜市内での広報

横浜市民に向けて、トリエンナーレの一層の浸透をはかるため、地元メディアの協力を得た。神奈川新聞は、18回に及ぶ長期連載をはじめ、きめ細かにトリエンナーレ全般をカバーした。TVKは、2000年5月より毎週水曜日の情報ワイド番組の中で、5分間を割いてトリエンナーレ紹介を継続して行なった。FMヨコハマは出品作家の一人、イチハラヒロコ氏の言葉による15秒の作品を会期中、ほぼ30分毎に連日流すほか、特別番組を編成・放映した。委員会は、次のような対応も行なった。

- ・地元店舗との連携（トリエンナーレ協力店舗では割引等の特典サービスを実施）
- ・商店街への横断幕やバナーの掲出
- ・交通広告の出稿
- ・教育委員会への働きかけ

(7) 海外広報

海外において横浜トリエンナーレを認知してもらうため、次のような対策を講じた。

- ・ICEE（国際博物館会議展示交流委員会）、CIMAM（国際美術館会議）、IKT（現代美術キュレーター国際連盟）の総会におけるプレゼンテーション実施
- ・美術雑誌（Art in America, Flash Art, ARTnews ほか）への広告出稿
- ・オープニング時に海外の美術ジャーナリスト12名を招へい
- ・他の国際展会場でのトリエンナーレ資料配布
- ・チャンネルJを通じた情報発信
- ・国際交流基金、国際観光振興会の海外事務所を通じた情報提供

## トリエンナーレを報じた主なメディア一覧

(別添)

### 【全国紙/ブロック紙/地方紙】

朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞、日本経済新聞、北海道新聞、十勝毎日新聞、釧路新聞、河北新報、デーリー東北、東奥日報、岩手日報、秋田魁新報、陸奥新報、北羽新報、福島民報、東京新聞、神奈川新聞、茨城新聞、千葉日報、下野新聞、上毛新聞、内外タイムス、中日新聞、静岡新聞、中部経済新聞、名古屋タイムズ、岐阜新聞、伊勢新聞、山梨日日新聞、長野日報、信濃毎日新聞、新潟日報、福井新聞、富山新聞、北国新聞、北日本新聞、京都新聞、大阪日日新聞、大阪新聞、神戸新聞、奈良新聞、中国新聞、山陽新聞、山口新聞、日本海新聞、山陰中央新報、高知新聞、愛媛新聞、四國新聞、徳島新聞、大分合同新聞、熊本日新聞、宮崎日日新聞、長崎新聞、琉球新報、八重山毎日新聞ほか

### 【専門紙/業界紙/タブロイド紙等】

朝日小学生新聞、教育家庭新聞、くりくり、広報よこはま、公明新聞、国際交流基金 NEWS、シティリビング、週刊さくいだいら、湘南 BLUE、新美術新聞、しんぶん赤旗、スポーツニッポン、聖教新聞、世界日報、SEVEN、チャイニーズドラゴン（中国巨龍）、中小企業よこはま、電通報、東海大学新聞、東京新聞 Today、東京スポーツ、東洋経済日報、図書新聞、日本海事新聞、日刊工業新聞、日経マーケティングジャーナル、日本工業新聞、パシフィック横浜コンベンションニュース、ぱる新宿ニュース、みなとみらい通信、リビング新聞ほか

### 【海外紙、英字紙】

韓国： 中央日報、東亜日報

インド： Financial Express

エジプト： Al Kahera

英国： Financial Times, The Guardian

フランス： Libération

ブラジル： Jornal Tudo Bem

日本： The Daily Yomiuri, International Herald Tribune/The Asahi Shimbun, International Press Zero, The Japan Times, and etc.

### 【美術雑誌/芸術系専門雑誌】

あいだ、アートネット アカデミー、いけ花龍生、小原流插花、韓国文化、ギャラリー、芸術交流アルテクス、芸術新潮、月間ミュゼ、サイン & ディスプレイ、CG World、書道界、新建築、ストレンジ・デイズ、デザインニュース、展評、日経アーキテクチュア、

Bien、美術手帖、ブレン、MADO 美術の窓、モーストリー・クラシックほか

【一般雑誌/情報誌/その他】

アヴィータ、アエラ、アジアエコー、イベント東京、イミダス、イントロ・G、ヴァンテーヌ、Winds、ヴェリィ、ヴォーグ ニッポン、エスクァイア日本版、エル・デコ、おーえる cong、オズマガジン、かながわ an、キャズ、CanDo!ぴあ、ギンザ、Club、グリ、ぐりーんぱる、経営者会報、ケイコとマナブ、国際交流、コンGRES& コンベンション、サイゾー、ザ・テレビジョン、サブラ、GQ Japan、じゃらん、週刊アスキー、週刊現代、週刊新潮、週刊宝島、週刊ディアス、週刊プレーボーイ、シュシュ、Studio Voice、ステラ、スニップ、Smart、Say、セブンシーズ、装苑、タイトル、旅の手帖、Cheek、TV ガイド、展示会情報、Tokyo1 週間、東京ウォーカー、東京人、東京ブロス、トランヴェール、Hanako、ハイファッション、花椿、ハーパース・バザー、ぱる新宿ニュース、ぴあ、ファンロード、フィガロジャポン、婦人公論、フラウ、ブリオ、ブルータス、ペン、ボイス、ポパイ、マイタウン、毎日が発見、マッツ、マリ・クレール、ミスター、ミセス、ミマン、ミュートス、[メモ] 男の部屋、メンズ エキストラ、モダンリビング、モニク、ゆうゆう、横浜ウォーカー、リー、流行通信、ほか

【海外雑誌/英字誌】

韓国： Wolgan Misool  
中国： Artist, Contemporary Art, Next Wave  
豪州： ART Asia Pacific, Art Monthly, Eye Line Magazine  
英国： Art Monthly, Graphics International London  
オランダ： Metropolis M  
ドイツ： Kunstforum  
イタリア： Flash Art, tema celeste  
スペイン： Neo2  
米国： Art in America, I.D. <The International Design Magazine>  
日本： Eye-Ai, Japan, Look Japan, Metropolis, Pacific Friend, Tokyo Journal, Tokyo Notice Board, and etc.

※ 活字メディアの報道振りについては、別刷り「掲載記事クリッピング集」を参照されたい。

## 【TV】

### ①NHK ハイビジョン <ハイビジョン・スペシャル>

「最新アートがやってきた！ 横浜トリエンナーレ 2001」

9/25、9/26（再）放送 午前8：00～10：00（120分）

※NHK 衛星第二にて10/8、21 放送

### ②NHK 教育 <新日曜美術館>

「発信！アート最前線 横浜 2001」

10/14 放送 午前9：00～10：00／午後8：00～9：00（60分のうち、最初の45分間を使って紹介）

### ③フジテレビ <テレビ美術館>

「横浜トリエンナーレ 2001 Part I～IV」

9/16、23、30、10/7 放送 各回午前5：30～5：45（15分）

### ④テレビ東京 <ナビゲーター21>

「世界のアート最前線!! 横浜・国際現代美術展」

9/22 放送 午後11：00～11：30（30分）

### ⑤チャンネルJ <Introducing Japan>

「横浜トリエンナーレ 2001 Part I～III」

3/1、9/5、9/20 放送 各回午後12：00～12：30（30分）

このほかに、CNN <World Report>、NHK テレビ<いと6けん>、テレビ神奈川<横浜情報スクエア>、日本テレビ<ズームイン!!サタデー！>、テレビ東京<ニュースアイ> 等の番組中で紹介された。

## Ⅶ ボランティア

トリエンナーレを広く一般の方々とともに盛り上げていくため、展覧会業務に参加するボランティア・スタッフを募集した。定員約 500 人の募集枠に 1,037 人が応募し、最終的に 10 代～70 代までの 719 人が参加した。準備期間の現場作業に始まり、会期中の作品保護への協力、イベントの運営補助、そして通訳、広報、事務局アシスタントなど多岐にわたる分野で熱心に活動を展開し、トリエンナーレの成功に大きな貢献を果たした。

### (1) 活動内容

#### ■ 会場スタッフ

- ・ 作品看視：会場での展示作品の看視および、作品に関するお客様への簡単な案内。
- ・ 会場案内：展示室内、会場周辺のお客様への案内。

#### ■ 展示スタッフ

- ・ 展示：作家の作品制作補助、作品展示・撤収作業の補助。
- ・ 記録：展示作業中の現場状況の記録。ビデオ、または写真。

#### ■ 事務局スタッフ

- ・ 事務：横浜トリエンナーレ組織委員会事務局内での作業。
- ・ 広報：資料・写真整理やポスター・チラシなどの配布・発送作業、プレス対応。
- ・ 通訳：展示作業、および会期中の、作家や海外のお客様への対応。

#### ■ 関連プログラムスタッフ

- ・ イベント：パフォーマンス、音楽イベントなどの運営作業の補助。
- ・ 教育：ワークショップ、シンポジウムの運営補助、ギャラリートークなど。

### (2) 参加者について

#### ① 活動別配置状況（重複分を含む延べ人数）

項目	作品看視	会場案内	展示	記録	事務	広報	通訳	イベント	教育	合計
人数	237 人	22 人	334 人	9 人	10 人	24 人	37 人	9 人	74 人	756 人

#### ② 性別、年代別人数

年代	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	合計
女性	95 人	330 人	71 人	40 人	24 人	7 人	567 人
男性	33 人	88 人	8 人	4 人	7 人	12 人	152 人
計	128 人	418 人	79 人	44 人	31 人	19 人	719 人

③ 地域別構成

地域	横浜市	神奈川県内	東京都	その他	合計
人数	318人	146人	181人	74人	719人
構成比	44.2%	20.3%	25.2%	10.3%	100.0%

(3) 募集および活動スケジュール

- ① 2000年6月：ボランティア・スタッフ募集を開始する。
- ② 2001年4月～6月：平成12年度に引き続き募集実施。
- ③ 2001年7月：選考、配置、通知の実施。7月14日に、横浜市開港記念館にて全体説明会を開催し、約450人が出席。
- ④ 2001年8月：役割別に研修を実施する。
- ⑤ 2001年9月～11月：業務の遂行。なお、会期中にて作品看視ならびに制作ボランティアの追加募集実施。

(4) 待遇

- ① 報酬、交通費、食費の支給はない。
- ② 展覧会のカタログ（1部）、および入場チケット（2枚）を進呈。
- ③ ボランティア保険に加入。（個人負担なし）

## アンケート調査結果

アンケート調査は、会期終盤の平成13年10月28日から11月11日までの間、パシフィコ横浜展示ホール前のコンコース、ならびに赤レンガ1号倉庫入り口において実施した。トリエンナーレの来場者全般を対象に、アンケート用紙への記入を呼びかけたところ、のべ14日間で4,279件の回答が寄せられた。以下は日計で最多の回答数を得た11月3日（祝日）の集計結果である〈有効回答数：1,185件、当日の入場者数：両会場合わせて14,292人〉。なお、最終項目の「自由意見」では、観客の生の声を届けるため、様々な意見をアトランダムに、編集をほとんど通さず掲載した。

また、朝日新聞社も別途アンケート調査を実施したので、その結果を本項の最終頁（P.51～52）に添付した。

### (1) フェイス・シート

#### 性別

男性	33.9%
女性	66.1%

#### 年齢

19歳以下	17.5%
20～29歳	44.3%
30～39歳	17.4%
40～49歳	9.9%
50～59歳	8.2%
60歳以上	2.8%

#### 居住地

横浜市	25.9%
神奈川県	12.2%
東京都	27.1%
埼玉県	6.3%
千葉県	4.6%
愛知県	3.1%
大阪府	2.1%
その他	18.7%

#### 展覧会来場頻度

今回が初めて	20.5%
年に1回程度	7.8%
年2～3回	28.7%
年4～5回	18.1%
2ヶ月に1回以上	7.3%
月1回	8.3%
月2～3回	7.1%
週1回以上	2.2%

### (2) アンケート結果

#### ① この展覧会を何でお知りになりましたか。

テレビ・ラジオ	17.0%	インターネット	3.9%
新聞	14.8%	友人・知人から	20.7%
雑誌	13.1%	学校の先生から	4.3%
ポスター	14.9%	偶然通りかかった	1.2%
チラシ	6.3%	その他	3.7%

\* メディア別

〈TV・ラジオ〉 1.NHK (62.6%) 2.FMヨコハマ (24.4%) 3.TV東京 (4.9%)

- 4.TV朝日(2.4%)、フジTV(2.4%)その他(3.3%)  
 <新聞>1.朝日(88.7%)2.日経(3.5%)3.神奈川(2.1%)、読売(2.1%)その他(3.5%)  
 <雑誌>1.ぴあ(51.2%)2.美術手帖(27.2%)3.装苑(4.8%)4.東京ウォーカー(4.0%)  
 その他(12.8%)

- ② 展覧会にいらした理由として、主なものを最大2つまでお選び下さい。

現代美術に関心があるから	45.2%
好きな作家の作品が出展されているから	10.4%
新聞・テレビ・雑誌等で見ても関心をもったから	29.0%
招待券をもらったから	7.0%
仕事のため	1.4%
その他	6.9%

- \* 好きな作家としては、草間彌生、会田誠、オノ・ヨーコ、赤瀬川原平、ピピロッティ・リストらの名前が具体的に挙げられた。

- ③ 会場についてどう思われましたか。

大変満足	19.9%
まあ満足	52.8%
どちらともいえない	17.1%
やや不満	7.5%
大変不満	2.8%

- \* 満足の理由としては、「広くてゆっくり観ることができたから」「多くの作品を1度に見ることができたから」と会場の広さに由来する快適さを挙げる人が多かった。一方、不満の理由としては「広すぎて疲れる」「人が多くて観づらい」などが挙げられていた。

- ④ 展示作品についてどう思われましたか。

大変満足	21.1%
まあ満足	52.6%
どちらともいえない	18.2%
やや不満	6.5%
大変不満	1.6%

- \* 満足の理由としては「面白かったから」「多種多様な(様々な国の)作品を観ることができたから」という回答が多く、不満の理由には、「映像作品が多すぎて疲れたから」「作家や作品についての説明が少ないから」などがあつた。また、満足・不満足に共通する回答として、「現代美術は難しい、理解困難な作品が多い」という意見や「玉石混交」「好きなものも嫌いなものもある」「面白いものも判らないものもある」といった戸惑い気味のものも。

- ⑤ トリエンナーレは3年ごとに横浜で開催されます。そのことについてどう思われますか？

実施すべき	69.9%
どちらかといえば実施すべき	18.6%
どちらともいえない	9.8%
どちらかといえば実施すべきではない	0.6%
実施すべきではない	1.1%



- \* 開催に賛成する理由としては「面白かったから、楽しかったから」「また観てみたいから」「身近に（現代）芸術に接することができるから」「現代美術を日本に浸透させるため」「他に同様/同規模の展覧会がない」「継続実施することに意味がある」など。反対の理由には「税金のムダである」などが挙げられていた。
- \* 次回に期待することとしては、「作家や作品についての説明を付けて欲しい」という意見が最も多く、続いて「参加型の作品を増やしてほしい」「触ることのできる作品を増やしてほしい」「作品のレベルアップを望む」との意見がこれに続く。また、作品配置の工夫や順路の設定、会場間の交通手段の改善などにより、疲れず観られるようにしてほしいとの要望も多かった。

⑥ 入場料金についてどう思われましたか。

内容に比して安いと思う	13.1%
内容に見合った金額だと思う	56.1%
内容に比して高いと思う	30.8%

⑦ これまでに海外で行われているビエンナーレやトリエンナーレなどの「国際展」をご覧になったことはありますか。

ある	3.3%
ない	96.7%

(3) 自由意見より

- ・ 常識を破りつつ、でもジャンクでもないもの、アイデアにもびっくり、そして見えない苦勞のあるものを観たい。(50代・女性)
- ・ 高校生以下 500 円は大きな魅力だと思います。3年後また来ます。(19歳以下・男性)
- ・ 美術というより芸術という感じだった。(19歳以下・女性)
- ・ 何か腑に落ちない。すっきりしない。(20代・男性)
- ・ 展示作品の数が多いので、現代美術の面白さや不思議さを知ることができてよかった。(20代・女性)
- ・ バラエティーに富んでいて良かった。親子連れ、家族連れで行くことができるのがよい。(50代・女性)
- ・ 色々あって面白かった。キャンディーをもらえたのも面白かった。何でも美術になるんだな、とこの展覧会を見て感じた。(19歳以下・女性)
- ・ これは何だろうと考えることに良さがあり、新しい発想と夢をもつのに必要だと思った。次回も期待している。(60歳以上・女性)
- ・ 大変面白かった。予想以上でした。こんなに混むと思わなかったのでびっくりした。若い人ばかりかと思っていたら、子供や老人もいたのでこれにも驚いた。次回展では都合が合えばボランティアとして参加したい。(20代・女性)
- ・ 休憩場所もアートっぽくてとても良かった。バツタが見られなかったのが残念。(30代・女性)
- ・ 空気が悪く喉が痛くなった。(19歳以下・女性)
- ・ 屋外展示までの行き方が判らず、また遠かった。(19歳以下・女性)
- ・ 作品の近くにいたスタッフが親切だった。(60歳以上・女性)
- ・ アートの香りとカルチャーの輝きをスペースの中で終わらせず、社会そのものへ反映させられるよう何らかの形で収束されるといい。(20代・男性)
- ・ 一番見たかった巨大バツタを始め、調整中の作品が多いのは困る。(30代・女性)

- ・ イベント屋が企画しても大差なかった気がする。キュレーションをしっかりとしてほしい。(20代・女性)
- ・ こういう訳の分からないものについて語り合うのは楽しい。しかしガイドがないと本当にわけが分からないものもある。あとグロテスクな作品は勘弁してほしい。中に入らないと分からない面もあるから注意書きは必要。(20代・女性)
- ・ 戦争を主題にした作品があったが、9月11日のテロのリアリティの前では幼稚に映った。(30代・男性)
- ・ 会場内のスタッフの質が低い。客への対応はキチンとしてほしい。(30代・男性)
- ・ 一般向けのエンターテイメントならハリウッド映画以上の映像やアミューズメントパークのアトラクション以上の体験型アートでなければいけない。後からくっつけたような薄っぺらなコンセプトを取ったら何も残らないような作品が多かった。人選にも疑問が残った。(30代・男性)
- ・ 車の駐車料金に対する割引があってもよいのでは。(30代・男性)
- ・ 2日間の有効チケットはとてもよいアイデアですが、できればもっと有効期間を延ばしてほしい。(30代・女性)
- ・ つまらない、感動しない、判らないという意見を多く聞くのは、これだけ多くの観客を集めただけに惜しい。(20代・女性)
- ・ このトリエンナーレで何をしたいのか。金儲けをしたいなら別の手段を考えた方がよい。(30代・女性)
- ・ カフェの料金をもう少し安くして下さい。(19歳以下・男性)
- ・ テレビで面白そうだと思い来場した。実際とても楽しく観ることができてよかった。初めて来る場所だったが迷うこともなかった。(20代・女性)
- ・ 作品の説明などしないようボランティアにもう少し教育を施したほうがよい。(30代・女性)
- ・ たくさん用意して満足しているとの印象。「見せよう」ではなく「見れば」という感じも受けた。遠くから来たのに残念。次はもっと良くなっていることを期待します。(20代・女性)
- ・ JRなどで配布されているチラシに所要時間と優待割引などの情報を載せてほしかった。下調べが不十分だと辛い。(20代・女性)
- ・ もっと胸を張って堂々と実施してよい。臆せず、新しいものをやってほしい。(19歳以下・男性)
- ・ ショップで売っているグッズの在庫不足が気になった。種類も増やしてほしい。(20代・女性)
- ・ 失望の一言 (40代・女性)
- ・ レンタサイクルのデザインが良かった。(20代・男性)
- ・ 時間制限のあるものは来場する人に対し良い印象を与えない。(20代・女性)
- ・ スタンプ・ラリーの企画がよかった。(30代・女性)
- ・ 時間がなくて少ししか観ることができなかったが、それなりに面白かった。科学分野の成果がとりこまれていたことに興味をひかれた。(20代・女性)
- ・ 美術系の学校で教師をしているので生徒にも勧めたが、実際楽しかったので正解だった。(30代・女性)
- ・ もっと地方から来ても判りやすいように、JR、駅などに宣伝表示しておいて欲しい。お巡りさんに尋ねても判らないと言った。(50代・女性)
- ・ 毎年のようにやってほしい。(19歳以下・女性)
- ・ 3年後が楽しみです。(20代・男性)
- ・ 映像がだるかった。もっと絵画作品を観たい。(19歳以下・女性)
- ・ 何度でも入場できるようにしてほしい。混雑対策が必要。(20代・女性)
- ・ 2日間で全会場をまわるというのも年齢的に少々きつい様に思います。もう少し日数を増やしていただけたら余裕を持って観ることができると思います。(50代・女性)
- ・ 休憩場所が欲しいです。場所が広大なだけに…。1ヶ1ヶのブースが狭く、あきらめた展示もあった。(30代・女性)

- ・ 美術展としては×。イベントとしてはいいのかも。(30代・女性)
- ・ 個室でひっそり見たいのもあれば、大会場でドーンと見たいものもあった。その辺の作品にあった会場作りにもっと力を入れてほしい。(20代・女性)
- ・ 1回目としては好スタートと思われる。(60歳以上・男性)
- ・ 屋外の展示物がもっと多いと当会場に来る間にもっと楽しめると思います。(50代・女性)
- ・ もっと知的レベルの高いものを考えるべき。(男性)
- ・ 横浜市全体で盛り上げようというのはとてもいい事だと思う。(20代・女性)
- ・ もっと宣伝すべき。(20代・女性)
- ・ 展示期間がもっと長いといい。ツアー・ガイドをもっと多くしたらいいなあと思う。作家の人たちとの交流会はどうでしょう(子供 VS 作家)。特に子供たちはものすごく興味津々で皆熱心に見ていました。(19歳以下・女性)
- ・ アートグッズ、在庫がたくさんあるといいと思う。あと、品数も増やして欲しい。アートグッズを買いにくるっていうのも目的のひとつだったから。(20代・女性)
- ・ 次回もぜひ楽しみにしています。このイベントを知ったのが遅かったので、もう少し宣伝して欲しい。(20代・女性)
- ・ ただでさえよく判らないのに日本語の説明が少ない(赤レンガの方)。もっと判りやすく説明してほしい。(30代・女性)
- ・ イヤホンガイドを活用したが、それにしても作品のコンセプトをもう少し説明すべきだと思うものがあつた。現代アートはコンセプトなので。(20代・女性)
- ・ またぜひ横浜で開催して下さい。(20代・女性)
- ・ パンフレットみたいなものを充実させて欲しい。それを入場時に無料配布。あと、触ったりできる展示品を増やしてほしい。(20代・男性)
- ・ もっと音をもれなくして欲しい。(19歳以下・女性)
- ・ 楽しかった。2日目に来るのも楽しみです。人がこんなに集まっていることに驚いた。とても良いことだと思う。町ぐるみで芸術を応援していること自体素晴らしい。展示会場だけでなく、屋外にも展示することはどんどんやるべきだ。(19歳以下・女性)
- ・ 国際展だから作品数が多いのは仕方ないが、時間にくらべて多く、じっくり見られなかった。音楽(サウンド)作品があるが、他の作品の小部屋でも聞こえて、意図しない音が聞こえて印象が異なってしまう気がした。(30代・男性)
- ・ どの会場も暗くてパンフレットも読みにくい。空気があまりよくなさそう。換気は出来ているのかなあ。(60歳以上・女性)
- ・ なんか意味がわからないのもあつた。感覚的にたのしかった。(19歳以下・女性)
- ・ たくさんの展示があるので現代美術のおもしろさや不思議さがわかってよかった。(20代・女性)
- ・ 作品の中に必要以上に「さわらないで」の警告が多過ぎて現代美術にそぐわない。参加型作品にあつて滑稽です。(50代・女性)
- ・ とにかく期間が短いと思う。(20代・女性)
- ・ どうして3年に1度なんですか。(20代・女性)
- ・ 不思議な作品が多い。(20代・女性)
- ・ 音声ガイドの他に作品の説明がほしい。赤レンガ館=床の段差でつまずいた。一考を要す。(60歳以上・男性)
- ・ 全国で同じようなことをやってほしい。山口からここまでくるのは本当に大変でした。(20代・男性)
- ・ 作品というよりアイデアのプレゼンテーションだと思った。(20代・女性)
- ・ 作者との話の場を持ちたい。全体的に実験的で、まだよく理解できないものも多くあり、少し無責任に感じた。(19歳以下・女性)
- ・ 会場間の無料運行バスなど、なんらかの交通機関を設けるべき。レンタサイクル 1,000円は高い。(30代・女性)